211001 実施版

【第 2 講】株式会社サン・ビーム「響」「ACTIVE WATER」

営業商談技能強化研修カリキュラム

研修上席講師：橋本宏昌

15：40～15：45
第 1 部　「響」プロモーション動画視聴

15：45～16：00
第 2 部　「響」営業商談・提案技能習得編
　　「響」の製品特長と導入事例

16：00～16：20
第 3 部　「ACTIVE WATER」営業商談・提案技能習得編
　　「ACTIVE WATER」の製品特長と導入事例

＊質疑応答・JPCC 中国会場スタッフへのアドバイス

研修実施報告

【第 1 部】「響」プロモーション動画視聴

実施報告

未実施

【第 2 部】　「響」営業商談・提案技能習得編
「響」の製品特長と導入事例

実施報告

中国側からの質問等

Q　セラミックが電磁波を放出、とあるが、交換しなくて本当に大丈夫なのか？
A　響に内蔵されたセラミックは、空間に放出されている電磁波を常にマイナスイオンに変えているため、メンテナンス不要。永久磁石が永久に磁力を帯びているのと同様の考え方。

Q　中国では、水質が非常に悪い地域が地方にはまだあるので、その当たりに営業をかけたいと思っているが、いかがか。
A　まず、この「響」は浄水ではなく、「活水」という点を正しく認識してもらいたい。汚れをとるための装置ではなく、水の性質そのものを変える装置であるということ。例えば泥水をいくら響に通しても茶色い水のままでてくる。(但し、水の性質は変わっている。)
飲み水を作りたい場合は、まず響に通した水を、活性炭素などのフィルターで浄水化することをおすすめしたい。
（野村氏）響はまず、ホテルなど、あらかじめ設備の整った施設等で、他との差別化を図るためのツールとして宣伝した方が効果的ではないか？

Q　展示場でおすすめのデモンストレーション等のアイデアはあるか？
A　・響を通した水と、水道水の味の違いを体験
・沸騰温度の違いを観察
（20℃スタートで、沸騰までの所要時間　水 3 分／響 2 分という結果がでている）
・紅茶の出具合（＝浸透力の証明）
・植物の成長区別

・響の前身のものになるが、これら実験の映像があるので中国側に共有予定。
（中国側の反応）
中国は現在、レストラン等でも省エネ対策が強化されているので、沸点温度の違いや浸透力の差という省エネの観点から需要が見込める。
基本的にお茶の国なので、少しの茶葉で従来と同じ濃さのお茶が作れるとなれば、絶大な需要が生まれるかもしれない。

【第 3 部】　「ACTIVE WATER」営業商談・提案技能習得編
「ACTIVE WATER」の製品特長と導入事例

実施報告

（開発者）WACHI 氏
ACTIVE WATER は、自身の闘病生活の経験から生まれたもの。
体に天然のミネラルを取り入れたいとの思いから研究を重ね、全 72 種類ものミネラルを含有することに成功。天然の免疫を最高値で得られることになった。
動物での実証実験では、以下のような効果を証明することに成功。
・明らかに犬・猫の獣臭が消えた
・排泄物の臭いが明らかに抑えられた

また、500ppm の ACTIVE WATER を 200 倍に薄めて、野菜を 2〜3 分漬けておくだけで、ケミカル物質が浮いてくることが実験により確認された。
外国（フィリピン）での農作物に対する実験結果として以下のものがある。
・農薬濃度の関係で輸出できなかったパイナップルを ACTIVE WATER に 3 分程度漬けておいたところ、白い物質（残留農薬）が浮いてきたのを確認。
その後当該パイナップルを提出したところ、無事輸出の検疫を通過できた。

また、この ACTIVE WATER を吹きかけるだけで、魚も腐らずミイラ化したことが実証実験によって確認されている。
更に詳細な実験結果としては、人の手に除菌剤として吹きかけたところ、スプレーした瞬間から効果を発揮し、およそ 6 時間継続したという結果も得た。（資料あり）

このように、アルコールよりも安全でコスパが高く、更に実績と効果も証明されているが、日本国内ではアルコール類ではないとの理由から、厚生労働省から認可されにくい現状となっている。
そのため、殺菌ではなく「除菌」と謳っている。

なお、日本では、コンビニやスーパーで売っているカット野菜などは、薄めたハイターで洗っている。健康懸念が高いため、大手コンビニ等ではハイター廃止を検討する流れになってきている。
ACTIVE WATER の安全性と明確な効果を普及していきたい。

事務局考察

とても分かりやすくご説明していただき、充実した研修であった。
資料や実験結果が豊富なので、基礎知識がなくてもすぐに理解できるため、営業しやすいのではと感じた。実験結果の動画やデータを、できる限り中国側に共有していきたい。

なお、質疑応答の時間が足りなかったため、第二回開催までに中国側からの質問事項や、講義しきれなかった部分をまとめておきたい。